

Title	ベルリンの日本人と東京のドイツ人：日本におけるアドルフ・ハルナック
Author(s)	深井, 智朗
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.50, 2011.3 : 177-208
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=3113
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

ベルリンの日本人と東京のドイツ人

——日本におけるアドルフ・ハルナツク⁽¹⁾

深井 智朗

はじめに——バルトに消された神学者

二〇〇一年五月七日にドイツの神学者アドルフ・フォン・ハルナツクの生誕一五〇年が祝われた。また二〇〇〇年が彼の代表作『キリスト教の本質』出版百周年でもあった。⁽²⁾二〇〇〇年前後、すなわち新しい世紀末を挟んでハルナツクの思想が再び注目されるようになった。それは単なる祝祭的な記念行事と出版計画のためではない。ようやくハルナツクについての冷静な研究、すなわち一次資料に基づいた、またこの時代の政治や社会の動向を十分に踏まえた研究がはじまったのである。「はじまった」と述べた理由は、たとえばハルナツクの業績とその影響力を考えれば、彼の著作集や書簡集の編集が既になされていてもよいはずであるが（書簡集の編纂は彼の政治的な立場と影響力のために比較的早くから一部行われてきたが）、全集に至っては現在に至るまで計画すら立てられていない。それどころか、彼の著作の完全な目録さえ存在しないのである。

しかしハルナツクの生誕一五〇年の祝い以後の研究状況は、彼の生誕百周年が祝われるはずであった一九五一年とは

明らかに異なっている。⁽³⁾ 一九五一年と言えばカール・バルトが六五歳の時で、彼が『教会教義学』の「創造論」を書き終え、「和解論」についての講義を開始した年である。⁽⁴⁾ バーゼル大学学長に推挙されたが、それを断つことが新聞紙上を賑わせ、また彼の政治的な発言が社会問題になるほどであった。五〇年代はルードルフ・ブルトマンとその学派の時代と分析されたりもするが、まだまだバルトの影響が強かったいわばバルト全盛期である。⁽⁵⁾

バルトの名を一躍有名にしたのは何といつても彼の『ローマ書注解』⁽⁶⁾であるが、彼がドイツの神学界において、俄然注目されるようになったのは、「バルト＝ハルナック誌上往復書簡」と呼ばれる誌上論争をハルナックと行つて以後のことである。それ以後彼は科学的 (wissenschaftliche) 神学⁽⁸⁾に対して教会的神学 (あるいは説教の課題としての神学) というキャッチ・フレーズとともに、神学史に新しいパラダイムをもたらす存在となった。しかしこのような単純な構図でハルナックを理解することは危険なことではないであろうか。なぜならハルナックもまたバルトと同じようにドイツの「教会の神学者」であつたからである。否むしろ彼はバルト以上にドイツの「教会に責任を負う神学者」であつた。⁽⁹⁾ それは神学校の教室や近代神学史の教科書で習つたことと違ふと言われるかもしれないが、事実そうなのである。問題はハルナックがどのような意味で「教会」の「神学者」であつたのか、ということである。⁽¹⁰⁾ このことを理解しないでハルナックの仕事を理解することはできないであろう。

ところでバルトの成功は必然的にハルナックの仕事を過去へと追いやることになつただけではなく、人々がバルトという基準をもつてハルナックを見るようになったという点ではそれはまさに「社会学でいうところのラベリング」⁽¹¹⁾であつたと言つてよいであろう。そのような意味ではハルナックは、ニュートンに対するロバート・フック、モーツァルトに対するサリエリのように、いわば「バルトによつて消された神学者」と言つても過言ではないだろう。しかし生誕一五〇周年以後の研究は、ハルナックに対するこのような明らかに不公平な取り扱いをやめ、彼の神学的な立場や政治的な立場についての冷静な議論を開始しようとしている。たとえばドイツで『キリスト教の本質』の新しい版がT・レ

ントルフの序文をつけて編集され、さらにはクラウス・デイター・オストエーヴェナーの校訂版が出版されたり、フランスで彼のマルキオン研究の翻訳が出版されているのは、生誕百年の時にはバルト・ブームの中で冷静な学問的な評価を怠ってしまった「神学者たちによる反省」⁽¹⁴⁾という意味も含まれているのではないだろうか。もちろんこのようなハルナック再発見の成果の評価についてはなお数年の時間を必要とするであろうし、ハルナックの神学的・政治的立場を今日の教会と神学の中に復興させようというアクションプランを作成することはそれほど意味のあることではない。そうではなく、われわれ自身も、偏見や神学的な立場を超えてハルナックの仕事にもう一度立ち返ってみるべきではないだろうか。⁽¹⁵⁾というのは、日本のみならずドイツにおけるハルナックの評価も、バルトの影響が強かっただけにまさにラベリングの状態で終わってしまったているし、ハルナックと言えば弁証法神学によって克服されてしまった神学者ということになっているからである。しかし弁証法神学はハルナックの何を克服しようとしたのであろうか。そして本当に何かが克服されたのであろうか。それすら実はまだ十分に検討されていないのである。それ故にハルナックからバルトへのパラダイム・シフトの評価も曖昧である。それは日本とドイツの神学界に残された共通の宿題である。そこでこれらの問題を考えるための準備のひとつとして、日本でハルナックの思想はどのように紹介されてきたのか、そのことをこの機会に報告したいと考えた。

1. ハルナックの著作の翻訳

ハルナックの著作や論文の日本語への翻訳は実は驚くほど少ない。翻訳は著作としては長い間『キリスト教の本質』以外にはほとんど見られなかった。『キリスト教の本質』は比較的早く、ドイツでの刊行の翌年、一九〇二年に日本メ

ソジスト教会の牧師であつた高木壬太郎によつて『基督教とは何ぞや』という題で翻訳がなされている。ただしこの翻訳は英訳からの重訳で、さらに抄訳でもあつた。その後一九〇四年に和田琳熊が『基督教の真髄』という題で、改めてドイツ語からの翻訳を出版している。

一九二五年にはイデア書院の『基督教名著集』の一冊として、山谷省吾が『基督教の本質』と題して翻訳し、さらに一九三九年に改訳して、『キリスト教の本質』として岩波文庫に入れられることになった。また山谷はその後さらに改訳し、玉川大学出版部から何種類かの『キリスト教の本質』を翻訳・出版している。

また比較的早くからハルナツクが編集したアウグスティヌスの著作のダイジェスト版が翻訳紹介されており、一九二三年に山谷省吾によつて『アウグスティンの懺悔録』が岩波書店から、同年に佐藤繁彦訳の『全オーガスティン』が叢文閣から、さらに一九三七年には服部英次郎が『省察と箴言』を岩波書店から翻訳出版している。

その他の著作としては一九三二年に森敬之が『基督教神学及び教会教理の成立』を長崎書店から、また山田保雄訳の『教義史要綱』が一九九七年になつて出版されている。後者は山田が戦争中に翻訳したもので、その後遺族が遺品の中から発見し、出版したものである。もうひとつ小さな論文としては、戦前のものであるが、「マルティン・ルッターの精神的意義」がフリッツ・シュトリヒ編（石川鍊次邦訳監修）『独逸大学の精神——アカデミーに於ける歴代碩学記念講演集』（高山書店）に収録されている。

そしてカール・バルトとの誌上公開往復書簡が、センセーショナルに紹介され、『カール・バルト著作集』の第一巻に収録されているのである。

以上のようにハルナツクの主要業績は『キリスト教の本質』を除けばほとんど何も翻訳されていないのである。しかしこの『キリスト教の本質』も考えてみればハルナツクの神学を必ずしも専門としない学生を含んだ一般講義の講義録であり、学術的な著作というよりは啓蒙書であり、厳密な歴史研究というわけではない。この点からも明らかな通り、

ハルナックは読まれる前に否定されてしまっており、彼はその思想や政治的立場が紹介されたというよりは、神学的なヴァンギヤルドたちによって否定されるために紹介されたようなところがある。

2. ベルリンにおける日本人とハルナック

さてそれでは次にハルナックの講義を直接聞いた日本人について紹介してみたい。ハルナックの講義を直接聞いた日本の神学者は安部磯雄、原田助、波多野精一、そして黒崎幸吉であろう。

原田助は日本組合教会の牧師で、東京、京都、神戸などでの牧師としての職務を経て、同志社大学の第七代社長となっている。彼自身の証言によれば、一八九一年六月にベルリン大学に立ち寄り、一回だけであったが、ハルナックの講義を聞いたという。⁽¹⁶⁾

安部磯雄は、やはり日本組合教会の牧師で、ドイツから帰国した後は同志社専門学校と東京専門学校で教え、一九二八年からは社会民衆党から衆議院に立候補し、戦前戦後を通して代議士として日本の社会党の指導的な立場にあつた人物である。安部自身の報告によれば、彼は一八九四年一〇月にベルリン大学に登録しているが、翌年一月には日本の教会の事情で帰国しているので、一八九四／九五年冬学期のハルナックの講義を最後まで聞くことはできなかったようである。⁽¹⁷⁾ それでも彼はその時の印象を次のように書いている。

ハルナック教授は基督教会史の大家であつて、二三百名の學生が其教場に押しかけた。……一ヶ月の後私は結局ハルナックの教会歴史と、ヴァイスの新約聖書注釈と、フォンソーダンの初代基督教の研究とにのみ

出席することに決定した。三教授は何れも基督教の起源から説き起こすので、私の歴史的研究には最も関係の深きものであつた。私の聞いた所に拠ると大学で時間割を決定する場合には、人気のある教授の講義を午前の第一時間に割当て、出席者の少ない講義を午前の第二及び第三時間、若くは午後配置するといふことであるが、これは事実らしく思はれた。ハルナック教授の講義は毎回第一時間目に行はれるのであるから、冬の日には聴講者に取りて可なり苦痛であつた。に拘はらず何時も満員の盛況を呈して居た。

波多野精一については彼自身の証言ではないが、山谷省吾によればやはりベルリンでのハルナックの講義に出席しているようである。⁽¹⁸⁾

以上の三人はハルナックの講義を部分的に聞いたに過ぎないが、次の黒崎は二学期にわたつて、ハルナックの講義に出席し、ハルナックと直接面談してもいる。そして帰国後の一九二六年六月に刊行された雑誌『新世』の六月号に「アドルフ・ハルナックの印象」という文章を掲載している。⁽¹⁹⁾

黒崎幸吉は一八八六年（明治一九年）に山形県鶴岡市に、黒崎研堂の長男として生まれた。研堂の父は庄内藩家老をつとめた酒井了明の三男で、後に彼は黒崎友信の養嗣子となった。研堂は庄内における書道興隆の基礎をつくり、書道家松平穆堂、吉田芭竹など多くの門弟を育て、他方で金融機関済急社（後に荘内銀行の前身六十七銀行に吸収された）の社主をつとめるなど庄内の経済界の指導的役割を果たしてもいた。

その長男黒崎幸吉は、一九〇七年（明治四〇年）に東京の第一高等学校を卒業し、法科大学（現在の東京大学法学部）の政治学科に入学、一九〇九年（明治四二年）一〇月から内村鑑三の聖書研究会に出席するようになった。一九一一年（明治四四年）に大学卒業後、住友総本店に入社し、高木寿美子と結婚している。その間経理課主計係、住友家嗣子住友寛一の補導係（一緒に渡米）、住友製鋼所副支配人などを歴任した後、一九二二年（大正一〇年）、妻寿美

子の急逝後、基督教伝道者となる決心をし、住友を退職し、内村鑑三の指導を受けつつ、その準備にあたっていた。

黒崎は一九二二年（大正十一年）欧州留学に出発し一九二五年（大正十四年）三月に帰国するまで、ドイツ、スイス、イギリスなどで各地の大学を訪ね研鑽を続けた。帰国後は『永遠の生命』を創刊し、鶴岡、神戸などに住み、さらに有名な『注釈新約聖書』、あるいはギリシア語辞典や文法書などを執筆し、無教会の指導者として、また新約聖書学者として、さらには著作家として広く知られるようになった。

黒崎は一九二二年（大正十一年）に欧州留学で出かけているが、それは第一次世界大戦後で、敗戦国となったドイツと、戦勝国となった日本のとの違いを身をもって経験する時でもあった。黒崎によれば、彼は欧州留学にあたって、住友の退職金として得た住友の株を担保に一万円の融資を受けて出かけている。

当時のドイツは第一次世界戦争に敗北し、カイゼルの退位となりドイツも一つの共和国となり、非常に貧困に陥りマルクの価値が非常に下落した時であったので、私は悠々として足掛け四年、前後二年半余の往復の滞在の旅費のほか、英、仏、伊、スイスなどにも行き、特に英国とスイスには一学期ずつ滞在して勉強もできるくらいであった。⁽²⁰⁾

「ベルリン滞在の」間に大学生からギリシア語やラテン語を教えてもらうことができた。当時ドイツは一般に戦後の貧困に苦しんでおつたので、アルバイトのために教えてくれる学生はいくらでもあった。謝礼は一回何千マルクとかいうので彼らにとつては大金であったが、当時の日本金にして一回十六、十七銭、まったく相済まないような額であった。しかしこれによつて私はどれほど助かったか分らない。信仰の本質的なものについては別に教えられることはなかったけれども、ドイツの学者の学風については学ぶところが非常

に多く、日本の大学に比較して羨ましい点が沢山にあった。しかし、それと同時にドイツの学風の特徴もこれを感じることができ、その背景の下にドイツの学者の業績を参照することができるようになったことは、非常に有り難いことであつた。⁽²¹⁾

その後黒崎はチュービンゲンで学び、さらにはジュネーヴに滞在し、名著『カルビン伝』のもとになる研究をなしている。ジュネーヴでは当時国際連盟の次長であつた新渡戸稲造や日本政府代表として国連に駐在していた前田多門一家との交流を楽しんでいる。さらに英国に滞在し、帰路パレスチナとエジプトに立ち寄り、一九二五年（大正一四年）三月三日に神戸に帰国した。

この黒崎幸吉は、一九二二／二三冬学期と一九二三年夏学期にベルリン大学でハルナツクの講義に出席している。「冬学期には『新約聖書緒論』、夏学期には『教会史』の講義」を聞いていた。⁽²²⁾もちろんこの時期ハルナツクは規則上は教授職を定年退職しているのであるが、特例で定年を延期され、教授会には責任を負わない教授として、講義と博士候補生の指導にあたっていた。黒崎が聞いたのは「教会史概論」と「新約時代史」の講義である。

ところでそれより早くハルナツクの噂を聞きつけ、彼らよりも早くハルナツクを知り、彼の著作を読んでいたのは作家の森鷗外である。彼は一八八七年四月一六日からベルリンに滞在しており、一八八八年七月五日には帰国の途についていることからして、ハルナツクの講義を直接聞くことはなかったと思われる。なぜならハルナツクのベルリン着任は一八八八年一〇月だったからである。ただハルナツク招聘問題はベルリン大学神学部人事の最重要問題として一八八七年一二月には既に公になつており、クルト・ノーヴァツクによれば既に公表されていた。ところがこの人事にプロイセン合同教会福音主義教会宗務局が介入し、人事が棚上げになつてしまったのである。最終的にはオットー・フォン・ビスマルクの政治的介入によって決着がつけられたのであるから、森鷗外はこの人事について何らかのことを聞いていた

可能性はある。というのも鵜外は、このハルナックを題材にした小説を帰国後、一九一二年になって書いている。それが「かのように」である。

3. ハルナックについての小説、あるいは森鵜外の「政治神学」

一九一二年一月の『中央公論』誌に不思議な小説が掲載された。それは「かのように」の題された短編で、著者は森鵜外である。この短編は日本ではじめて書かれた政治神学的な文芸作品であると言ってよい。というのも、鵜外がこの小説の中で描き出しているのは、ヴァイルヘルム帝政期にプロテスタント神学が担っていた社会的な機能についてだからである。あるいは、それは一見、現実世界の政治政策とは何の関係もないように思える「神学的なテキスト」の背後にある「政治的な暗号」の解説と言ってもよいであろう。鵜外はそれを驚くほど正確に行い、日本に紹介し、それだけではなく、それによって独自の政治的な見解を当時の日本社会に向けて語ろうとした。それが神学者でも社会学者でもなく、陸軍軍医総監であった森林太郎によってなされた、ということとは興味深い。その時代の日本の神学やプロテスタントリズムはそのようなことは考えてもいなかったに違いない。森鵜外こそ、ヴァイルヘルム帝政期におけるプロテスタント神学の社会的な機能を十分に知っていただけではなく、ハルナックの神学の政治的意義さえも理解できた数少ない日本人であった。⁽²³⁾ この報告は、その意味では、鵜外によってかつて提起された問題を、彼の時代よりも、はるかに入手し易くなった諸資料を用いて、改めて検討するということに他ならない。⁽²⁴⁾

それでは、鵜外の問題提起とは何であろうか。それは、第一にはこの時代の神学の社会的・政治的機能の解明という問題意識である。既に「神学的なテキスト」の背後にある「政治的な暗号」の解説と言ったことである。第二は日本社

会の問題としての「ヴィルヘルム帝政期」という視点である。つまりなぜ日本人がヴィルヘルム帝政期の神学を知らねばならないのか、という問いである。

森鷗外は一八八四年から一八八八年までドイツに留学し、一八八七年の四月以後はベルリン大学で学んでいる。この鷗外はその時の経験を踏まえて、フィクションとノンフィクションの部分を上手に結び合わせて、「かのように」という短編小説を発表した。この小説は、高橋義孝氏によれば次のような成立の経緯を持った小説である。

明治四三年にいわゆる幸徳事件が起こり、日本にも社会主義、無政府主義、労働運動が漸くにして活発になってきて、あらゆる権威的なもの、すなわち皇室、伝統、旧来の道徳体系をゆさぶりはじめている。そして鷗外は、そういう支配階級、保守主義はいかに処すべきかについて考え、「山県〔有朋〕公から危険思想対策、すなわち思想善導の方法を求められ、それに応じて書いたのが『かのように』という小説である⁽²⁵⁾」と
いうのが通説になっている。

この小説の解釈についてはもつと別の可能性もあると思えるし、おそらく鷗外の書きたかったことは、日本の保守主義の啓蒙という高橋氏の指摘のさらに先にある問題であつたと思う。それは日本における「リベラル・ナショナリズム」の問題であつたと言ってもよいであろう。しかしここでは森鷗外の作品の解釈に留まるわけには行かない。それよりも重要なことは、鷗外が、かの「政治的な暗号」を解読し、日本の近代化の問題をヴィルヘルム帝政期との類比的な関係の中で論じようとしていることである。

森鷗外には、実は「かのように」だけではなく、一九一二年から執筆が開始された秀麿を主人公とした連作があり、一九一四年、すなわちヨーロッパで第一次世界大戦が開始された年に短編集『かのように』としてまとめられ、出版さ

れている。この短編集には「かのように」、「吃逆」、「藤棚」、「鉋一下」の四編が含まれている。

この小説の主人公である秀麿は、学習院を出て、文科大学校（すなわち現在の東京大学）で歴史学を学び、ドイツのベルリン大学に約三年間留学を経験した子爵であり、歴史家の仕事に興味を持った貴族という設定になっている。彼は歴史学者になることを望まれたというわけではなく、貴族としての教養と箔とを身につけるために自由な留学を許された。しかしおそらく小説の中に書かれている状況は、鵜外が留学した時代のことを反映しているのであろう。もともと鵜外はそのあたりの記述については慎重にフィクション化を試みており、「エエリヒ・シュミット総長」の時代に「大学の三百年祭」を祝ったというのがその典型的な例である。ベルリン大学は一八一〇年の創設であるから、この記述は百年祭のことを模範としているのであろう。事実「棕鳥通信」に次のような記述がある。

十月十日の晩からベルリン大学の百年祭が始まった。先ず寺院で礼拝があつて、そのあとで三千人の学生が松火行列をした。日本学生が交つてゐるのに、見物人がいたづらをした。雨が降り出したのを皆平気でやつてゐた。……ベルリン大学の百年祭で、十月十一日に帝の演説があつた。教育に關係のない、*selbststaendige Forschungsinstitute*を作つて Humboldt の遺志に協はしめる為め、約一千マルクを出すといふことである。⁽²⁶⁾

この「教育に關係のない」、「独立した研究所」(*selbständige Forschungsinstitute*) というのが、カイザー・ヴィルヘルム協会、後のマックス・プランク研究所のことであり、ハルナックがその初代の総裁となり、一九一一から一九三〇年までその職にとどまつた。⁽²⁷⁾

ところで秀麿は当時のドイツの最高の知性が集まりつつあつたベルリン大学の中でも、とりわけ神学者アドルフ・

フォン・ハルナツクの講義に興味を持ったという手紙を父に宛てて書いている。この手紙こそがハルナツクの神学的なテキストの背後にある「政治的な暗号」の解説の作業に他ならない。少し長くなるが引用してみよう。

ベルリンにいる間、秀麿が学者の噂をしてよこした中に、エエリヒ・シュミットの文才や弁舌も度々褒めてあったが、それよりも神学者アドルフ・ハルナツクの事業や勢力がどんなものかと言うことを、繰り返してお父さんに書いてよこしたのだが、どうも特別な意味のある仕事らしく、帰って顔を見て、土産話にするのが待ち遠いので、手紙でお父さんに飲み込ませたいとも言おうような熱心が文章の間に見えてきた。殊に大学の三百年祭りの事を知らせてよこした時なんぞは、秀麿はハルナツクをこの目覚しい祭りの中心人物として書いて、ウキルヘルム二世とハルナツクとの君臣の間柄は、人主が学者を信用し、学者が献身的態度を以って学術界に貢献しながら、同時に君国の用をなすと云う方面から見ると、模範的だと云って、ハルナツクが事業の根柢をはつきりさせるために、とうとう父デオドジウスのことにもまで溯って、精しく新教神学発展の跡を辿つてのべていた。⁽²⁸⁾

ここで秀麿が描き出したハルナツクの姿が、鵬外によるハルナツクの神学的なテキストの背後にある「政治的な暗号」の解説作業の成果なのである。典型的には「ウキヘルム二世とハルナツクとの君臣の間柄は、人主が学者を信用し、学者が献身的態度を以って学術界に貢献しながら、同時に君国の用をなすと云う方面から見ると、模範的だ」という言葉の中に現れ出ている。それはまさに神学的テキストと政治的なコンテキストの相関関係の指摘に他ならない。さらに詳しく検討してみよう。鵬外はハルナツクの仕事に以下に述べる二つの点で関心を寄せていると言つてよい。そして鵬外はこの二つの点の故に、「ドイツの強みが神学に基づいている」⁽²⁹⁾という結論を引き出すのである。

ひとつは、ドイツにおける政治と神学との結びつきに関することである。鵬外は次のように述べている。

政治は多数を相手にした為事である。それだから政治をするには、今でも多数を動かしている宗教に重きを置かなくてはならない。ドイツは内治の上では、全く宗教を異にしている北と南とを擣きくるめて、人心の帰嚮を操って行かなくてはならない。⁽³⁰⁾

これはこの時代の宰相ビルマルクの政策のことを宗教との関係で説明している箇所である。すなわちプロイセン主導によるドイツの統一、とりわけ「小ドイツ」政策は、事実上この時代の政治的カトリシズムの勢力を抑えての、政治ということになったわけである。鵬外は言う。

それだからドイツの政治は、旧教の南ドイツを逆らわないように抑えていて、北ドイツの新教の精神で、文化の進歩を謀って行かなくてはならない。それには君主が宗教上の、しつかりした基礎を持つていなくてはならない。その基礎が新教神学に置いてある。その新教神学を現に代表している学者はハルナックなのである……ここにドイツの強みがある。⁽³¹⁾

これはハルナックが当時置かれていた政治的な状況、そしてプロテスタントの学者としての立場の説明としては適切なものであり、ハルナックの神学的なテキストの中に隠された政治的な暗号をこの時代の社会的なコンテキストの中で解明した具体的な例である。またそれは当時の社会で神学がどのような機能を果たしていたのか、ということを知る上でも適切なものである。

さらにもうひとつ鵬外がこの小説で述べていることはさらに重用である。それは近代人における「宗教」と「信仰」との乖離の問題である。鵬外はここで神学という学問を現実世界ではまったく何の意味も持たない虚学としてではなく、神学の社会的な機能を見抜き、むしろ政治的な機能を持った神学があったことを紹介している。

鵬外は、ドイツにおける神学、とりわけルター派の神学の役割がこの時代の政治において重要なものであるというのならば、必然的に人々はさぞ信仰深い人々なのだろう考えるわけだが、彼は実は現実にはそうではない、ということに注目している。また人々が伝統的な教会制度に熱心に帰依しているかと言えばそうでもない、ということも指摘している。ここが鵬外の視点の鋭いところで、この時代に必要とされたのは、「信仰」ではなく「神学」であつたという指摘である。しかし問題は「いかなる神学か」ということなのである。

鵬外は次のように述べている。「一体宗教を信じるには神学はいらない」⁽³²⁾。神学は学問をしない、すなわち一般民衆には必要ないというのである。必要なのは「学問を修めた人々」のためなのだというのである。すなわち啓蒙主義の影響を受け、合理的な精神を身につけた者たちのことである。鵬外は言う。「元来学問をしたものには、宗教家の謂う『信仰』はない」⁽³³⁾。それは、教養はあるが、信仰のない人だという。しかしこの学問のある人々は、確かに「信仰」はないが、社会における「宗教」が果たしている意義は認めている人々であり、そのような機能を支える「神学」を必要としている人々である、というのである。これが近代における宗教と信仰との乖離現象であり、同時のこの時代の「神学」の特徴なのである。

近代人は合理的な思考方法や生活態度を身に付けることによって「内容」としての「信仰」は既に失っているが、「形式」としての「宗教」は社会で役割を果たしているという矛盾を鵬外は見落とさなかつたのである。そしてドイツにおいて神学は役割を果たしているという場合には、実はこの「宗教」としてのルター派の政治的役割のことなのである。鵬外は政治的な機能を果たす「神学」について知っていたのであり、そのような神学の使用の仕方の政治的な意味

についても十分に承知しており、ドイツにそのような機能を十分に果たし得る成熟した政治家や官僚のみならず、神学者がいたことを紹介している。

鵬外はさらに、近代人として、信仰のない人を批判しないが、信仰もなく宗教の機能も否定する人は「危険思想家」であるという大変興味深い命題を提示する⁽³⁴⁾。そして逆に、信仰を持つてはいないが、神学の政治的な機能を熟知し、社会における宗教の役割を肯定できる人が重要なのであり、それが近代人であり、実はそこにこそドイツの強みがあると言うのである。

鵬外はこの時代の人々の宗教についての態度を三つに類型化したということであろう。第一には「信仰のある者たち」でありこれは一般の民衆であり、伝統主義者たちである。第二に、「無信仰で、宗教の必要性を認めない者たち」であり、これは「危険な思想の持ち主たち」ということになる。第三が「無信仰だが宗教の思想だけは認める」いわば中庸な、穏健な思想の持ち主たちである。「かのように」で提起されている問題は、このように教養があるが信仰については形式的に敬意を払うだけの人々が、いかにして、信仰はなくとも、宗教の必要性だけは認めるようになるか、という問題であり、第三の立場の者たちの育成による国家形成という問題である。アドルフ・フォン・ハルナックの仕事はまさにこの第三の者たちの育成に関与しているのだ、というのが秀麿の口を通して語られた鵬外の見方である。そしてドイツの強みはこの第三の人々が政治的な要所を占めつつあるということである。

このように鵬外は驚くほど正確に、ドイツ・ルター派的なものの公共世界における機能を分析し、最近J・ハーバーマスが『ナショナリズムと宗教の間』(二〇〇五年)⁽³⁵⁾で指摘したようなドイツの伝統的な社会における宗教の公共性の問題について、鵬外は小説という手法を用いてであるが、既に一九一二年の時点で論じていたのである。

さらには鵬外がこの短編小説の中で問うている第二のことは、日本の状況であり、日本においてはたしてこのような立場は可能か、という問いが提起されるのである。鵬外のこの短編小説は、ヴィルヘルム帝政期の社会における神学の

機能を明らかにしながら、日本の社会と政治を批判的に論じる視点と材料とをハルナックという神学者の仕事を通して提供しようとしているのである。

4. 東京におけるドイツ人とハルナック

さて、日本人がベルリンでどのようにハルナックの講義を聞いたのかということ、またどのようにハルナックを受容したのかということの次に、日本にやって来たドイツ人がどのようにハルナックを紹介したのかということについて考えてみたい。これもまたこれまで見落とされてきたが、日本におけるハルナック受容の重要な視点なのである。

鵜外は小説の中にベルリン大学の神学教授で、皇帝ヴィルヘルム二世の正枢密顧問官、ビスマルクの盟友であるアドルフ・フォン・ハルナックの姿を描きだしたが、ハルナックの姿を自伝の中で証言しているのは、三浦アンナである。また三浦の教え子のひとり美濃部綾子による私家版の三浦アンナの回想録も三浦が語ったこととしてハルナックに触れている。⁽³⁶⁾

三浦アンナ、ドイツ名はアンナ・シュランゲは一八九四年一月一日に北ドイツのポルメルンのピューリッツに生まれている。曾祖父の代にフランス革命をのがれてドイツに移住した貴族の子孫で、この地方の領主のひとりであった。芸術にも学問にも早くから才能を示し、ベルリン大学哲学部、後に神学部に学び、ハルナックのもとで学位論文を書くまでになっていた。

三浦アンナは第一次大戦後ドイツ留学中の京都大学建築学教授の三浦耀と結婚し、共に帰国し、京都大学と立教大学でドイツ文学とキリスト教美術史を教えた。伝記の中では三浦アンナはベルリン大学のハルナックのもとで、オリゲネ

スに関する論文で博士号を取得したと記されているが、ベルリン大学の資料では確認することができなかった。これらの伝記的記述は三浦アンナ自身の証言ではなく、またハルナツクの思想を神学者ではない美濃部が詳細に紹介すること也不可能であるから、これを第一次資料として扱うことは困難である。しかし三浦とハルナツクとの関係は、たとえば三浦アンナが日本で産んだ娘に「ハルナ」という名をつけたことなどから理解することはできる。三浦が述べている通り、「ハルナ」の名は、「ハルナツク」の名前からとられたものである。また三浦アンナは日本で夫を亡くした後、ハルナツクを通して京都大学の波多野精一に就職の斡旋を依頼し、京都大学と同志社大学でドイツ語講師の職を得ていることから、三浦がハルナツクの指導を受けた学生のひとりであったことは確かなことであろう。

しかし既に述べた通り三浦アンナの場合には、ハルナツクに思想について言及した一次資料、しかもハルナツクの側の資料でも裏づけを得られる論文などがないことから、三浦アンナを通してのハルナツクの影響について語ることは困難である。

この問題を考える際に重要なのがオットー・モリーッツ・シュミードルという独逸普及福音新教伝道会の宣教師である。そして彼が日本で最初にハルナツクの思想と生涯とを紹介した人物であろう。

シュミードルについては、ドイツ国内でも既にその名を忘れられて久しい人物である。シュミードルは一八五八年に生まれ、ライプツィツヒやイエーナで学び、H・グーテ、R・A・リプシウスの影響を強く受けている。そして何よりもライプツィツヒ時代のハルナツクに師事しその強い影響のもと初期キリスト教史、そして後にはいわゆる神学的リベラリズムの立場からのイエス伝研究についての著作を残している。⁽³⁷⁾

一八八七年に独逸普及福音新教伝道会の宣教師として来日し、独逸学協会学校と新教新学校で教え、いわゆる「新神学」としてセンセーショナルに伝えられた立場とともに知られるようになった。

それではこの独逸普及福音新教伝道会とは何であろうか。隅谷三喜男によれば、「独逸普及福音教会は教会として拡

大して行くことはなかったが、それにもかかわらず、この教会ほど明治社会に影響を与えたキリスト教会は他にはない。社会的な影響という点から考えるならば、この教会はアメリカから来た諸教派教会に決してひけをとるものではなかったのである⁽³⁸⁾。この独逸普及福音教会が「日本に与えた影響は、ただキリスト教界にのみ限られるものではなかった。文学、哲学、歴史学などの学術にも大きな影響を与え、社会主義思想とその運動においても少なからぬ足跡を残した⁽³⁹⁾」。

「独逸普及福音新教伝道会」はヴィルヘルム帝政期のルター派リベラル・ナシヨナリストたちが中心になって創設された、世界伝道のための社団である。その成立から日本伝道までの歴史をまず概観しておこう。

一八八四年六月五日に、ヴァイマルで、ヴァイマル公カール・アレクサンダーの庇護のもとにドイツの世界政策を前提に、その宗教的な課題を担う世界伝道のための社団が設立された。それが *Allgemeiner Evangelischer-Protestantischer Missionsverein* である。この社団の世界宣教のヴィジョンは、この社団の中心的な牧師のひとりであったエルンスト・ブスによって確立されたもので、一八七六年に書かれた彼の『キリスト教伝道、その原理的正当性と実践的適応』はその思想的な源泉である⁽⁴⁰⁾。この論文は元来懸賞論文であったが、この中でブスは宗教史学派と呼ばれるようになる神学研究の立場、すなわち比較宗教史研究を前提にし、他方でキリスト教的な文化の妥当性と優位性に基づいた伝道論を展開している。

またこの社団においてブスと共に理論的・実践的な影響を与えていたのがチューリッヒの牧師ヴィルフリート・シュピンナーであり、彼がこの社団の最初の宣教師として日本に派遣されることになったのである。

その際承認されたこの社団の規約の中に次のような項目があることに注目してよいであろう。すなわち「この伝道会は、キリスト教及びキリスト教的な文化を、非キリスト教諸国民に対して、それらの諸国民の既存の真理契機と結び付けることによって拡大させることを目的とする」(第二条)。あるいは「非キリスト教世界における一般的な文化的傾向

（植民地の開発、地理学や民族学その他）を助け、そこに生きている信者たちの仲にキリスト教的な概念を養うこと」（第三条）とあるように、この社団ははじめから、従来から海外伝統をしていた敬虔主義グループの素朴な伝道活動とは異なっていた。彼らの活動には、キリスト教の信仰の伝達としての伝道を超えて、文化としてのキリスト教の伝達という側面が前面に出ていた。

この普及福音新教伝道会は、一八八五年九月三〇日に、マンハイムで第一回総会を開催し、オットー・プフライダーが講演をした。この講演にこの社団の特性がよく現れ出ていと言つてよいであろう。プフライダーはまさにこの時代のリベラル・ナシヨナリストの典型的な神学者であつた。彼は既に述べた通り、一八七〇年と七一年に起こつた帝国の成立は、帝国の市民宗教としての「ドイツ的キリスト教」が認識する「国民史（*nationale Geschichte*）の絶頂期における神の歴史的な啓示⁽⁴¹⁾」であると言ひ切り、そこにドイツ特有の文化理念が啓示されていると見たのである。これを彼は帝国の基盤に据えるべきであり、それは「ドイツ・プロテスタント的な人間性の宗教⁽⁴²⁾」であると彼は考えていた。

彼の講演は「非キリスト教的な人類についてのキリスト教的文化民族の教育的な課題⁽⁴³⁾」というもので、彼はこの中でもドイツ的キリスト教における神の歴史的な啓示を語り、他の非キリスト教的な民族をこのキリスト教的な文化と世界観へと導くことが、キリスト教的文化民族としてのドイツの課題であると主張している。このリベラリズムの世界伝道論は明らかに従来の素朴なキリスト教の福音の伝達という敬虔主義グループによるものとは異なつて、この時代のリベラリズムの政治的なヴィジョンと世界政策とに基づくものであつたと言ふべきであろう。

またヴィルヘルム帝政期のリベラル・ナシヨナリストの神学者であるエルンスト・トレルチはこの伝道社団の活動を支持している。彼はベルリン大学のグスタフ・ヴァルネックによつてなされたこの社団への批判に答え、社団を擁護し、さらに注目すべきは、イギリスやアメリカの宣教師の活動から区別される伝道が必要であり、庶民層への浸透や貧

民救済活動のような手段を用いて伝道するのではなく、教養層への浸透とキリスト教文化の社会的な広がりを示さねばならないと主張している。またヴァルネックはこの時代のドイツにおける伝道学の大家であったが、ヴァルネックも従来の敬虔主義の伝道活動も、直接的な影響力（つまりキリスト教徒になった数や伝道事業の具体的な数値など）を重んじるために、より重要な文化への浸透などの間接的な影響力を軽視しているとトレルチは批判したのである。⁽⁴⁴⁾

この伝道社团は一八八五年になって、第一回総会の直前に、最初の宣教師としてチューリッヒの牧師であったヴィルフリート・シュピンナーを選び、派遣を決定した。当初のこの社团はインドへの宣教師の派遣を考えており、インドに関心を持ち、宗教学的なインド研究を続けていたシュピンナーが選ばれたのである。ところが、この頃ベルリンに留学中であった和田垣謙三（後の東京帝国大学農学部教授）とドイツ駐在公使青木周三（後の外務大臣）等の強力な要請があり、伝道地はインドから日本へと変更されることになった。「日本民族に属する人々自身から直接に、日本でこそ全力をあげて活動してほしいという要請がなされ、早速その方向に進むことに決めた」と伝えられている。⁽⁴⁵⁾

シュピンナーは元来チューリッヒのA・E・ヴィーダーマンの学生で、インドの宗教に興味を持ち、日本に赴任する際にもドイツ人で当時イギリス在住の著名な宗教学者マックス・ミュラーを訪問し、アジアの宗教についての情報を得ている。ちなみにこのマックス・ミュラーはこの普及福音伝道会の後援会のメンバーであり、名誉会員でもある。シュピンナーはその後アメリカを経由して、一八八五年九月に日本に到着した。

シュピンナーは元来スイス人であったが、この社团はヴァイマル公カール・アレクサンダーの庇護のもとに設立されていたので、彼はヴァイマルの領邦教会に移籍し、カール・アレクサンダーの庇護のもとに日本に派遣されたのである。それ故にシュピンナーはヴァイマルの領邦教会における職務をそのまま日本において遂行する立場にあった。礼拝様式、神学教育の方法、また使用言語に至るまで本国との関係を保持しており、これはいわばヴァイマルの領邦教会のひとつの教区（Gemeinde）が日本に作られたことと同じであった。

彼は築地の外国人居留地に住み、東京に教会を組織することになったが、その組織は駐日ドイツ公使フォン・デンホフを中心になされた。シュピンナーは彼の来日の四年前に独逸学の普及を目指し、また明治政府の独逸学への友好的な奨励のもとに創立された独逸学協会学校で教えながら、伝道活動を開始した。一八八七年一月三十一日に本郷の壱岐坂に壱岐坂会堂を建設しているが、この教会の最初の洗礼者が永井荷風の祖母であった。

さらにはシュミンナーは門下の学生を教育するために新教神学校を設立している。この学校は小さな学校であったが、ドイツの諸大学の神学部のカリキュラムを見本とし、ドイツ語の他にも、古典語や哲学、そしてもちろん神学の諸科を教育した。三並良の『日本に於ける自由基督教と其先駆者』は普及福音教会五〇年を記念して出版されたものであるが、その中にこの神学校のカリキュラムに触れた箇所があり、聖書学や教会史は当時の宗教史学派の影響のもとに、歴史的・批判的な研究が講義され、組織神学や倫理学、宗教哲学のみならず、哲学史の講義なども充実していたことが読み取れる。たとえば後に日銀総裁となり、さらには枢密院の構成員となった深井英五はこの神学校の教育が、それ以前に受けた同志社の普通教育よりもはるかに高度なものであったことを証言している。驚くべきことに、その講義の多くはドイツ語でなされていた。そのため、この学校は小さいが、当時大変有名になり、森鷗外などはしばしば出入りしており、小説『キタ・セクスアリス』などにもこの学校の様子を描いている。

注目すべきは、一八九一年に上富坂に新校舎が落成した際の落成式のことであり、この落成式の主賓は東京帝国大学総長の加藤弘で、彼は次のように祝辞を述べている。

新教神学校の課程を見ると、帝国大学文科大学に一人の姉妹を得たような気がして誠に喜ばしい。近來私立学校は営利を目的とし、又は拝金宗の実用教育を主義とするものが多いが、新教神学校のような学校が盛んになれば、その悪風を救い、幽遠高尚の思想を涵養することができるであらう。⁽⁴⁶⁾

この普及福音教会が、明治政府における英米仏の影響に対して、政治においても、学問の世界においても対抗し得るようなドイツ学とドイツ文化の移入に貢献し、また政府内の親ドイツ派の庇護を受けていたことは明らかである。この教会と神学校の急速な発展と浸透は、たとえば東京大学における英語による講義の廃止や、ドイツ的な学問の浸透と深く関係していると見て間違いない。

明らかにこの独逸普及福音新伝道会の日本における伝道活動は、アメリカからやって来た宣教師たちのそれとは異なっていた。その特徴については今後詳細に比較・分析されるべきであるが、その顕著な特徴を先に示すならば、アメリカのプロテスタントイズムが、明治政府や官僚と結びつくよりは、民間であることの自覚を比較的強く持ち、明治になり失業した武士階層から多くの指導者を得たのに対して、この伝道会は、むしろ明治政府に近く、その信徒や理解者の多くが官僚や政府の要職についた者たちであったということである。

すなわちキリスト教＝アメリカの宗教という意識、あるいはアメリカの経済的な援助と結びつき、アメリカ文化の代弁者としてのキリスト教、反伝統的であり、反政府というイメージのもとにつくりあげられたキリスト教ではなく、むしろ既存の国家システムと結びつくキリスト教を目指したのである。

たとえばシュピナーの講義を聞き、最初にキリスト教徒となった者たちのリストは赤司繁雄氏によれば次の通りである。

向軍治（慶応大学教授）、丸山通一（旧制第一高等学校教授）、谷泰吉（医師）、反井扑（医師）、島安次郎（工学博士）、中村健一郎（彦根高商校長）、司馬亮太郎（独協中学校長）、小川尚義（台北大学教授）、藤浪鑑（京都大学医学部教授）、長岡文之助（林博、林野局技官）、桜井恒二郎（医博、九州大学教授）、小松原

英太郎（文部大臣）、樫田亀一郎（医博、侍医）などがいた。また後の第一三代日銀総裁となる深井英五もシュペンナーの新神学校の卒業生のひとりである。さらには「呉秀三（東京大学教授）、高田耕安（茅ヶ崎南湖院の創設者）、大西祝（早稲田大学、京都大学教授）、藤代禎輔（京大学長）、宮入慶之助（日本住血吸虫の発見者）⁽⁴⁷⁾」。

さてシュミードルは一八九二年に帰国するまでの五年間に、原始キリスト教史を中心とした教会史、初期キリスト教文学、宗教哲学などの講義を担当し、また『六合雜誌』やこの教会の機関紙である『真理』に論文を発表し、近代聖書学におけるいわゆる「高等批評」と呼ばれた立場からの議論を展開し、アメリカの教会の伝道によって成立した日本の教会の正典論に基づく聖書学、あるいは保守派の聖書信仰の立場にある人々に衝撃を与えた。来日中に書いた『東京の教会の一週間』⁽⁴⁸⁾はドイツでも評判になり、帰国後はヴァイマル近郊のゲッテルの教会の牧師を経て、最後はギムナジウムの宗教の教授となった。

さて、このシュミードルが一八九〇年（明治二三年）に『真理』の第二巻二二号の四七九〜四八一頁に「ハルナック氏略伝」という小さな文章を書いている。これがおそらくわが国で最初に書かれたハルナックの紹介である。以下のような文章である。最後に「み訳」とあるのは三並良のことであろう。漢字は引用者の判断で一部当用漢字に直してある。

5. シュミードル「ハルナツク氏略傳」

「Adolph Harnack⁽¹⁴²⁾は千八百五十一年七月を以てドルパート府に生るドルバート⁽¹⁴³⁾は魯領東海諸州の大學の在る所にし
て魯國當時の皇帝がスラヴェン人種を合一せんとの大計畫を爲さざりし以前はドルパート大學の教授は殆んど皆獨乙
人なるか然らざれば獨魯人より成れり氏の父テアドジウス、ハルナツク氏は千八百十七年ベートルスブルクに生れ後
同府大學の神學科教授に任ぜられ、殊に極端なる固執ルーテル派に属せり、アドルフ、ハルナツク氏は千八百六十九
年より七十二年迄ドルパートに在て神學を修め後千八百七十四年に至りライプチヒ府に於て教會歴史教授の免狀を得
千八百七十六年同府大學員外教授となり余嘗てライプチヒ大學に遊學せし日ハルナツク教授の講義を聴けり此時教授
尚ほ甚だ若冠恰も一學生の如し然れども其の博學多識にして辨舌爽活なる能く聴講者の望を得たり當時余の爲め甚だ有
益なりしは教授の聴講者及び教授の設立せし教會歴史會の會員よりなる神學研究會なりき此會に於ては會員互に思想の
交換、學理上の討論或は他人の論文を批評せしか爲め余は始めて學理研究の嚴正なる方法を學び得たり余等同輩當時基
督降誕祭に際しハルナツク教授を招待したることありしか此時教授は余等學生に直正の神學生理想は宗教上深邃と不屈
不撓の勉學とを兼有することなりと勸告せり千八百七十九年教授はギーセン大學に招聘せられ正員教授となり當時ラ
イプチヒ大學數百の學生は教授をして大學を去らしむべからずと文部大臣に献白せしか事無益となり教授は遂にギーセ
ン大學に趣けり數年を出でずして學生等再び教授をライプチヒ大學正員教授として招聘せんと盡力する所ありしかライ
プチヒ固執派の柱右と呼ぶる、教授ルータルト氏大に之れに反對せしを以てやみぬ後ハルナツク教授はマールブルク大
學に招聘せられしが後又たベルリン大學に招聘せらるゝことなれり當時普國の固執派は百万力を盡して之れを拒絶せん

とせり然れとも當時の文部大臣子爵ゴスレル氏は井ルヘルム帝の保護を得て神學科大學の意志を貫徹し遂に若冠なれども近世に鏘々たる教會歴史家を伯林大學教授となりたりし今や教授は獨逸の首都にありて勢力ある甚だ大なり

其の著述の著明なる者を舉ぐれば下の如し教授は他の二碩學と協向して使徒時代の師父の著書に批評を加へて出版し又Zeit des Ignatius, das Mönchthum seine Ideale und Geschichteを著述せり其の大著述と云ふべき者は「教義歴史」三卷^[14] (Lehebuch der Dogmengeschichte, 1886-90) なり其の第一卷はニカヤ信條近年に至る迄の發達、第二卷と三卷は現今に至る迄の教義の發達を論せり各卷皆一年を出ですして再版せられたり其他教授は「教義略史」(Grundriss der Dogmengeschichte) 及び二百年代の新約書 (Das neue Testament ums Jahr 200.) を著述せり千八百八十七年以来教授はギーセン府のシューレル氏が發行する「神學的文學誌」(Theologische Literaturzeitung) の論文を草す同雜誌は新版の神學書を揭示し且つ批評するものなり又た教授は余が親友マルチン、ラーデの發行する週刊雜誌Die christliche Weltに協力し又た近來に至り發行せらるゝZeitschrift für Theologie und Kircheに協力す此の雜誌は聖書教會歴史等の研究に従事するのみならず復た大に實際的に盡す所あり

ハルナック教授の神學上の立場は次の如し教授は始め固執派に属したりしが後ち忽ちゲッチンゲン府なる調和派神學の大斗アルブレヒト、リツチュルの影響を受けたりリツチュル氏ハ學理と其の所論とは甚だ論難すべきものありと雖ども氏の人物の爲め其の學生は甚だ氏に服せりハルナック教授は特にリツチュル氏の説を執て神學上の辦理(Speculation)を排撃し神學の上に哲學の影響することを拒絶し、其の古代基督教に関する所論も亦たりツチュル氏の影響を受けたりしが後又たチュービンゲン學派に属する教會歴史の碩學オーベルベック氏の影響を受けてリツチュル氏の偏頗を放棄したり故に今日教授が古代基督教に関する所論は批評進学の柱右なるホルステン、ホルツマン、リップジウス、プライデレル、ワイツゼツケル等の所論と異なる所甚だ僅少なり是れ以下の論文^[15]を見ても知るべきなり要するに教授は、春秋尚ほ強壯にして活発、信仰に富み學理上極めて自由なる神學界の一大人物なり(み訳)

おわりに

日本におけるハルナツクの紹介は実は英語圏とほぼ同時期に開始されており、他の国々よりかなり早い段階で行われていると言つてよい。またベルリンを訪問した日本人はアメリカやイギリスの神学者よりはるかに少ないが、その仕事の本質を正確に理解し、日本に紹介したと言つてよいであろう。

しかしその後何といつても日本の神学と教会はカール・バルトとその学派、さらにはルドルフ・ブルトマンとその学派の影響を大きく受け、ハルナツクの仕事は不当に取り扱われてきたと言つてよいであろう。オットー・モーリッツ・シュミードルが一八九〇年に最初のハルナツクの紹介をしてから、今年〔この講演は二〇一〇年になされた〕まで一二〇年の時間が経過したが、この一二〇年の日本におけるハルナツク研究をさらに詳細に検討してみることも必要であるが、それ以上に大切なことは、カール・バルトや神学的アヴァンギャルドたちのラベリングを直接知らない世代によつて、ハルナツクの仕事それ自体の研究や検討が、自由に、バルトの呪縛を越えてはじまるということであろう。

そのために第一に、ハルナツクの主要なテクストの翻訳が開始されるべきであろう。近年ハルナツクの『マルキオン』のフランス語訳が出版されたが、この研究は近年のグノーシス研究の発展によつてさまざまな批判にさらされているが、いずれのその後の研究もハルナツクの仕事をどう評価するかというところからはじまっていることからして、マルキオン研究のもつとも重要な書物の一冊であることに変わりはない。日本にはまだこの書物の翻訳さえない。また彼の『教義史』全三巻の翻訳もない。さらには『キリスト教の本質』の最新の校訂版による翻訳もない状態である。これらの翻訳が進められなければならないであろう。

また第二に、ハルナックがヴィルヘルム帝政期において果たした政治的役割についてのドイツ政治史との共同研究が、また当時の学問・文化行政との関係、すなわちドイツ大学史との共同研究が必要になるであろう。

最後に、明治以後の日本の近代化との関係でハルナックの仕事が再評価されるべきであろう。すなわち東京とベルリンとを、もちろん地理的、文化的、宗教的、政治的差異を踏まえながらも「同時代」という視点から考察するという課題である。それは従来の比較文化、比較宗教学などとは違った方法論を必要としている。シュミードルが東京の神学校で行ったハルナックについての講義と、ベルリンで波多野精一が聞いたハルナックの講義は言葉の壁を越えて、「同時代」という視点で考察されるべきなのである。ハルナックの宗教政策と日本の明治時代以後の国家と宗教との関係、あるいは日本の明治政府による学問行政とハルナックの文教政策や大学論は、比較や影響史の研究というよりは、同時代における二つの政策事例として研究されるべきである。それは同時代史的研究と呼ぶべきもので、かつて二〇〇六年に「日本におけるドイツ年」の企画のひとつとして森美術館で「東京―ベルリン／ベルリン―東京」が行われた時に試みられた方法論でもある。それは今はじまったばかりのハルナック研究において重要な視点となるはずである。

注

(1) 本論は二〇一〇年九月七日にミュンヘン大学プロテスタント神学部で行った講義の日本語訳である。講義原稿の校正や修正はドイツ語訳は原田芳乃氏と Alf Christophersen 教授に助けていただいた。

(2) Adolf von Harnack, *Das Wesen des Christentums*, Herausgegeben und kommentiert von Trutz Rendtorff, Gütersloh 1999 が出

版された。また拙論「ハルナックのキリスト教の本質について」『形成』(二〇〇一年六月号)を参照のこと。ちなみに『キリスト教の本質』は一九〇〇年の初版、一九六四年にブルトマンの序文を付して再編集されたいわゆる「ブルトマン版」(Adolf von Harnack, *Das Wesen des Christentums. Mit einem Geleitwort von Rudolf Bultmann*, München)とトゥリルハスによる序文が付されたいわゆる「トゥリルハス版」(Adolf von Harnack, *Das Wesen des Christentums. Mit einem Geleitwort von Wolfgang Trillhaas*, 2. Auflage, Gütersloh 1985)とがあり、それに「レントルフ版」が加わったことになる。それにさらに二〇〇五年にオストエーヴェナー版が加わった。注13を参照のこと。

(3) この当時の様子については J. Rohls, *Protestantische Theologie der Neuzeit II. Das 20. Jahrhundert*, Tübingen 1997 を参照のこと。

(4) Eberhart Busch, *Karl Barth Lebenslauf. Nach seinen Briefen und autobiographischen Texten*, München 1975, 1978 (3. Aufl.), 352ff. を参照のこと。

(5) この時代の神学史の分析としては、Wolfhart Pannenberg, *Problemggeschichte der neuern evangelischen Theologie in Deutschland*, Göttingen 1997 を参照のこと。

(6) Karl Barth, *Der Römerbrief*, Zürich 1922 (2. Aufl.)

(7) バルトの論文集に収録された往復書簡は以下の通りである。Karl Barth, *Antwort auf Herrn Professor von Harnack offenen Brief, in: Die christliche Welt*, 37 (1923), Nr.16/17 (= Karl Barth, *Theologische Fragen und Antworten. Gesammelte Vorträge*, Bd.3) 1957

(8) *Wissenschaftliche Theologie* の訳語を「科学的」とするか「学問的」とするかは難しい問題である。Wissenschaftlich にはいわゆる「自然科学」という意味合いは一般的にはないが、精神科学が自然科学的な方法論を取り入れ、ひとつの「科学」になろうとした努力した時代の考え方の産物として「科学的神学」という訳の可能性も可能である。「学問的」と訳した場合には、より包括的であり、諸学問論、あるいは諸学の体系を想定しているという意味を持つ。

(9) この逆説的な命題の意味については拙著『アポロゲティークと終末論』(北樹出版)の「プロローグ」および第一章「第二章」三章を参照のこと。またこの時代における神学的な状況については Friedrich Wilhelm Graf, *Protestantische Theologie in der Gesellschaft des Kaiserreichs*, in: *Profile des neuzeitlichen Protestantismus*, Bd.2, Kaiserreich Teil, Gütersloh 1992 を参照の

こと。

- (10) この点についてのいわば社会学的な考察、あるいはドイツ精神史的な考察としては、上山安敏『神話と科学——ヨーロッパ知識社会 世紀末〜二〇世紀』（岩波現代文庫）を参照のこと。
- (11) 水垣渉「アドルフ・ハルナックにおける『キリスト教のギリシア化』の問題」『途上』（神戸改革派神学校）一七（一九八二年）を参照のこと。ハルナックの教理史研究の具体的な内容についてはここでは触れることはできない。彼の仕事の評価については以下を参照のこと。Thomas Hübner, *Adolf von Harnacks Vorlesungen über das Wesen des Christentums unter besonderer Berücksichtigung der Methodenfragen als sachgemäßer Zugang zu ihrer Christologie und Wirkungsgeschichte*. Frankfurt, 1994
- (12) Adolf von Harnack, *Das Wesen des Christentums*. Herausgegeben und kommentiert von Trutz Rendtorff, Gütersloh 1999
- (13) Adolf von Harnack, *Das Wesen des Christentums*. Sechzehn Vorlesungen von Studienreden aller Fakultäten im Wintersemester 1899/1900 an der Universität Berlin gehalten von Adolf v. Harnack. hsg. von Claus-Dieter Ostövenner, 2005, 2007 (2. Aufl.), Tübingen
- (14) Karl H. Neufeld, *Adolf von Harnack—Wesen des Christentum* (1900), in: Mariano Delgado (hrsg.), *Das Christentum der Theologen im 20. Jahrhundert. Vom „Wesen des Christentums“ zu den „Kurzformeln des Glaubens“* Stuttgart 2000, 17; ders., *Adolf von Harnacks Konflikt mit der Kirche. Weg-Stationen zum Wesen des Christentums (= Inns-Brucker Theologische Studien, Bd.4)*, Innsbruck 1979
- (15) Vgl. S. Sykes, *The Identity of Christianity. Theologians and the Essence of Christianity from Schleiermacher to Barth*, London 1984
- (16) 原田健編『原田助遺稿集』一九七一年 八六頁
- (17) 安部磯雄『社會主義者となるまで——安部磯雄自叙傳』明善社 一九四七年 一三〇頁以下
- (18) 山谷省吾「解説」『波多野精一全集』（第二巻）岩波書店 四八〇頁
- (19) この全文は拙論「黒崎幸吉のアドルフ・フォン・ハルナック論——『新世』に掲載された『全集』未収録の論稿をめぐって」『聖学院大学総合研究所紀要』四五号（二〇〇九年）一八七〜二二五頁を参照のこと。

(20) 『永遠の生命』第三六〇号 昭和三六年九月 『著作集』第五卷 三九四頁

(21) 同右

(22) 黒崎のハルナック論については拙論「黒崎幸吉のアドルフ・フォン・ハルナック論——『新世』に掲載された『全集』未収録の論稿をめぐる」『聖学院大学総合研究所紀要』四五号(二〇〇九年)一八七―二一五頁

(23) ちなみに森鷗外はヴィルヘルム帝政期の終わり、一九一五年にハイデルベルクからベルリンに転任することを最初に日本に伝えた人物でもある。「宗教哲學の講座。Ernst Troeltschがハイデルベルヒからベルリンに遷つて、Schliermacherの跡の歴史的講座を占めた」と「水のあなたより」(一九一四年七月一五日)に書いている。(『鷗外全集』第二七卷 九一三頁)

(24) この点については既に拙著『ハルナックとその時代』(二〇〇〇年)において論じたことであり、それより先に山上安敏氏が『神話と科学——ヨーロッパ知識社会 世紀末―二〇世紀』(一九八四年)で取り扱っていた問題である。

(25) 新潮社文庫版の高橋義孝氏の「解説」より引用。

(26) 引用は『近代文学注釈体系 森鷗外』(校訂・注釈・解説三好行雄)一九六六年(有隣堂)三四一頁より

(27) この点についてはAdolf von Harnack, *Zur Kaiserlichen Botschaft von 11. Oktober: Begründung von Forschungsinstituten*. in: *Die Woche* 12.10.1910, 1933–1937を参照のこと。「その組織とは、個人の贖金による研究所の創設を因うとして一九一一年に創立されたカイザー・ヴィルヘルム協会である。この協会は、価値ある貢献の見返りとして特別なガウンを着用する権利と、年に一度皇帝と朝食を共にする権利とを持つ会員と、おもに会員たちの中から選出される全体的方針の決定者たる理事会と、理事会から選出される管理委員会、そして理事会によつて選ばれる協会会長つまり管理委員長とから構成されていた。一九一一年から一九三〇年にかけて会長職にあつたのは、この協会の主要な創設者でもあるアドルフ・フォン・ハルナックである。ハルナックの当初の計画によれば、プロイセン政府が研究所のために土地を提供し、財源と指導者が調達可能になった時点で設立され、そしてその際、協会側がその建造物を建てて、その運営費をまかなうことになっていた。さらに、政府は研究所内部に役職を設けることができ、この事実によつてその在職者は公務員とされた。」(John L. Hellbron, *Max Planck. Ein Leben für die Wissenschaft 1858-1947*, Stuttgart 1988 (『マックス・プランクの生涯』(村岡晋一訳)法政大学出版局 七二頁(一部変更して引用した))

(28) 引用は新潮社文庫版から行っている。五四頁

- (29) 同上書 五五頁
- (30) 同上
- (31) 同上
- (32) 同上
- (33) 同上
- (34) このあたりの鵬外の発言は、ヴィルヘルム帝政期の社会における宗教の機能についてのものとも適切な考察のひとつであらう。そのことはたとえば Heinrich August Winkler, Vom linken zum rechten Nationalismus. Der deutsche Liberalismus in der Krise von 1878/79, in: Geschichte und Gesellschaft 4 (1978), 5–28; ders., Der Nationalismus und seine Funktionen, in ders. (Hrsg.), Nationalismus, Königstein 1978, 5–46; Reinhard Wittram, Kirche und Nationalismus in der Geschichte des deutschen Protestantismus und im 19. Jahrhundert, in: ders., Das Nationale als europäisches Problem, Göttingen 1954, 109–148; Horst Zillesen (Hrsg.), Volk-Nation-Vaterland. Der deutsche Protestantismus und der Nationalismus, Gütersloh 1970; ders., Protestantismus und politische Form. Untersuchung zum protestantischen Verfassungsverständnis, Gütersloh 等の記載と比較すれば一目瞭然である。
- (35) Jürgen Habermas, Zwischen Naturalismus und Religion. Philosophische Aufsätze, Frankfurt a. M. 2005, 14ff.
- (36) 美濃部綾子『三浦アテナ夫人伝』美濃部嘉一(大地社印刷)昭和四三年刊
- (37) Otto Moritz Schmiedel, Die Hauptproblem der Leben-Jesu-Forschung, 1902
- (38) 隅谷三喜男『近代日本の成立とキリスト教』新教出版社 二七頁
- (39) 鈴木範久『明治宗教思潮の研究』東京大学出版会 八二頁
- (40) Ernst Buß, Die christliche Mission. Ihre prinzipielle Berechtigung und praktischer Durchführung. Eine von der Haager Gesellschaft zur Verteidigung der christlichen Religion gekrönte Preisschrift, Leiden 1876
- (41) Otto Pfeiderer, Grundriß der christlichen Glaubens- und Sittenlehre. Berlin 1880, 42
- (42) どのようなキリスト教の構想についてかは、またブライバラーにすぎない F. W. Graf, Theonomie, Fallstudien zum Integrationsanspruch neuzeitlicher Theologie, Gütersloh 1986

- (43) Otto Pfeiderer, Die erzieherische Aufgabe der christlichen Kulturvölker an der nichtchristlichen Menschheit, in: Zeitschrift für Missionskunde und Religions-wissenschaft, 1 (1886), 22-34
- (44) この点については堀光男「トレルチと日本伝道——『普及福音新教伝道会』の神学的背景」に詳しい。
- (45) 三並良『日本に於ける自由基督教と其先駆者』文章院出版部 一九三五年
- (46) 「神学校の長所」『真理』二五号 明治二十四年一〇月
- (47) 赤司繁雄『自由基督教の運動——赤司繁太郎の生涯とその周辺』朝日書林 一九九五年 一二頁
- (48) Otto Moritz Schmiedel, Eine Woche in der japanischen Christengemeinde zu Tokio, 1888
- (49) 「以下の論文」とは、同誌の同号にやはり三並氏によって翻訳され掲載された、「新約書の編成 伯林大學教授 アドルフ、ハルナック 三並良訳」のことである。